

# 看護医療学部開設10周年

2001年の開設から今年で10周年を迎えた看護医療学部。この節目の年に学部1期生と、現役4年生に手記を寄せてもらいました。実務経験を積み、さらなる研鑽に励む田口さん、来春には医療の最前線に立つ岩間君。看護医療学部だからこそ得られた学びや、それぞれの志をききました。

## 人間の健康・生活を支える看護学の探究



ここのり  
田口 紀子  
看護医療学部1期生  
(2001年入学)  
健康マネジメント研究科  
後期博士課程1年

2005年  
学部卒業 東京大学医学部附属病院に入職  
2009年  
慶應義塾大学大学院  
健康マネジメント研究科修士課程入学  
2011年  
同後期博士課程に進学

私は1期生として看護医療学部で看護の道を歩き始め、今、健康マネジメント研究科後期博士課程の学生として10年前と同じこのキャンパスで学べることをうれしく思います。

看護医療学部では、看護の対象である「人間」や人間を取り巻く「環境」、「健康」について理解を深めながら看護の方法を

学び、さらに看護の視点から社会制度やビジネスを考えたりする機会もありました。また医療機関に限らず、保健や福祉などさまざまな領域で人々の健康を支える方々や、地域で生活する方々と接する機会があり、そのような体験から多くの刺激を受け、看護を多角的な視点で捉えられるようになりました。さらに、海外での実習科目や自主的な海外活動を支援する奨学金制度など、グローバルな学習に対してサポートを得られることも看護医療学部の魅力の一つです。私も米国での実習に参加し、特に人間の「健康と生活」という視点の重要性と、これに対応する看護・医療のシステムを学びました。それらは今でも、看護師として働いたり研究したりする際の基盤となっています。その人らしく健康的な生活ができるように、看護職としてどのように支援してい

くかを考える上で、非常に有意義な学習ができました。卒業後は他の大学病院に就職しましたが、他職種と連携して患者さんのニーズを捉え、看護を提供する際、本学部で学んだことに誇りと自信を持って実践経験を積み重ねられたと自負しています。

私は在学中から、患者さんが食事を口から食べることの大切さを感じていましたが、働く中で「もっと看護師にできることがあるのでは」という疑問が湧き、それを追究したいと考えて大学院修士課程へ進学しました。もちろん、慶應義塾を選択したのは、看護を幅広い視点で深く捉えるという看護学への理念(考え方)に賛同したからです。修士論文では、摂食・嚥下障害のある患者さんに対する「経口摂取の可能性を引き出す」という看護師の取り組みを明らかにしました。改めて看護は実践の学問として、臨床での実践と研究とが協働していくことの必要性を強く感じました。人々の健康上のニーズ

や問題を解決するために、さらに臨床に密着した研究成果を生み出したいと思ひ、後期博士課程で研究を続けています。

看護学を学び、研究していく上で、看護医療学部環境は本当に恵まれている

と思います。ここで研究を継続できることはとても幸せなことであり、学部の発展にも貢献できるよう、今後も頑張つていきます。

※食べること・飲み込むことに関する障害

## 看護の重みを感じた看護医療学部での経験



岩間 裕司  
看護医療学部 4年  
(2008年入学)

看護医療学部開設10周年という大きな節目を学生として迎えられることを大変光栄に思います。

高校時代に部活動が同じだった仲間が癌を患ひ、本人も家族もさまざまな苦悩を抱えてつらい闘病生活を送るのを目の当たりにしました。この経験から私は、同じように病で苦しんでいる人を専門的な立場で、しかも身近な存在になって支えていきたいと思うようになりました。そこで私は、患者さん中心の看護・医療を深く学ぶことができると考え、本学部を選択しました。

学部の授業の特徴は、講義、演習、臨

地実習という形態で学習することです。講義では、日本のみならず世界の人々がその人らしく、より健康的に暮らせるよう、広いテーマから専門的な分野まで学び、看護の立場で何ができるかを深く考え、追究していきます。演習では、支援技術を習得したり、さまざまなテーマについて小グループで話し合ったりします。他の学生と意見交換をし、自分だけでは思いつかなかつた視点に気づき、視野を広げることができます。

看護実践を体得できるのは、臨地実習の場面です。健康な人から病を患っている人まで直接関わつて学びます。私にとって、あるホスピスに入院する高齢女性Aさんとの出会いが非常に印象的でした。その方は肺のレントゲン画像が真っ白になるほどの多巣性の肺癌で、余命2週間という状態でした。私はAさんのつらい気持ちがあしでも和らぐようにテラスに

お連れして気分転換を図つたり、そばに一緒にいて話を聴いたりすることを心がけました。実習最終日、Aさんに「ありがとう、あなたに会えてよかったわ」と言っていたいただきました。何のケアもできないという無力感を持つていた私でしたが、死を目にしたAさんの穏やかな表情から、病を持ちながらも強く生きようとする人間の強さを感じるとともに、人生の最期の貴重な時を共に過ごす立場にある看護師の役割の重みを感じました。この時のなんとも言えない感慨はおそらく一生忘れることはないでしょうし、実習ならではの学びとして非常に印象的な経験でした。

今年度から始まつた慶應義塾の看護医療学部、医学部、薬学部の3学部合同教育では、事例の討論を通して、患者さんを中心としたチーム医療を提供するための実践的な学びを得ることができました。医療現場において看護職の果たす役割の大きさと重要性を再確認できたと感じています。

私は将来、看護師として在宅医療のフィールドで自分の能力を発揮することを目指し、患者さんやそのご家族を第一に考えたエビデンス(根拠)に基づく医療を提供できるよう、看護実践を通して、常に学び続けていきたいと考えています。